



TITLE:

チュルゴーの『富の形成と分配』

AUTHOR(S):

山口, 正太郎

CITATION:

山口, 正太郎. チュルゴーの『富の形成と分配』 . 経済論叢 1930, 30(2): 344-390

ISSUE DATE:

1930-02-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129849>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第

卷十三第

行發日一月二年五和昭

論叢

國稅地租の課稅標準

法學博士

神戸 正雄

國際價格の理論

文學博士

高田 保馬

經營學論

經濟學博士

小島昌太郎

說苑

チルゴの『富の形式と分配』

法學士

山口正太郎

明治政府の貸附金

經濟學士

吉川 秀造

講演

大都市及其附近

交通機關

法學士

種田 虎雄

雜錄

ドイツの合理化運動の機關

經濟學士

谷口 吉彦

フランスの庶民銀行に就て

經濟學士

松岡 孝兒

米國に於ける生命保險信託に就て

經濟學士

和賀賢治郎

近江愛知郡志を讀みて

經濟學士

菅野和太郎

近着外國經濟雜誌主要論題

說苑

チュルゴアの『富の形成と分配』

山口正太郎

一序 說

チュルゴアは重農學派の殿將であると共に、將に此派より袂を分たんとする點に立つてゐる。彼の主要論文『富の形成と分配に就ての考察』¹⁾は此分岐點を示すと共に、此論文の發表當時、重農學派の機關雜誌たる *Ephémérides du citoyen* の編輯者にして、且つ此派の有力なる學者の一人たるデュボン・ド・ヌムールとの争が、彼をして此派を去らしむる事情を告げてゐる。

抑もチュルゴアの『富の形成と分配』は、當時フランスに留學せる支那の二青年 Ko 及び Yang の故國に歸るに際し、『支那に關する諸問題』²⁾と名くる五十二個條の注意書を與へ、更に之を説明するために書いたもので、チュルゴア自身、最初は之を公表する意思を有せなかつたものであるが、デュボン・ド・ヌムールの懇望により、一七六九年末より翌七〇年にかけて發表したもので執筆

- 1) Turgot, *Réflexions sur la formation et la distribution des richesses. Ephémérides du citoyen.* 1769. Nov. et Dec. 1770. Jan.
- 2) Turgot, *Questions sur la chine adressées à deux Chinois. Oeuvres de Turgot.* ed. par Schelle. t. II. p. 523-533.
- 3) Hector Denis, *Histoire des systemes économiques et socialistes.* t. I.

は、それより三年以前一七六六年の暮であつた。

(註) アッシンレーは此論文の英譯 *Reflections on the formation and the distribution of riches. Economic classics.* 1914 の序文の中で、此 *Ephémérides* 誌は發行が遅れ、實際は一七七〇年一月、二月、及び四月に出たと云つてゐる。チュルゴーは最初の二篇を見て、編輯者デュボンに抗議書を二月二日附で出し、最後の篇のみチュルゴーの意の如く原文の儘で出てゐる事から推察すると此雜誌の發行が順次、遅れてゐたと云ふアッシンレーの説は正しい。

此チュルゴーの『富の形成と分配』に對して、デュボンは重農學派の立場から訂正を試みたのであつて、例へば第十七節に於てチュルゴーが、『地主、即ち最初の耕作者及び其相續人に土地の所有權を確保する處の人類の契約と人々の法律』と云へる處に、人類の及び人々のと云ふ字句を故意に省いたので、重農學派の立場からすれば地主の土地所有權は自然の秩序に基き神の攝理によつて定められたものであつて、人爲の秩序によつて初めて認められたものではないからである。

然るにチュルゴーは重農學派の根本主張たる自然の秩序には常に無思慮であり、人爲の秩序のみを眼中に置いてゐたのである。更に又、デュボンは此節の中で『土地の所有權は一番最初の農業上の投資の代價としてゐあつて、此農業上の投資によつて彼等の土地が耕作可能の狀態に齎されたのであり、謂はゞ此投資は土地と合體として存するものである。』との一句を附加したのである。此點はチュルゴーの甚だしき憤慨を買つた處(二月二日附デュボン宛の手紙)であつて、チュルゴーにとつては農業上の投資は人類の働の存する處であり、土地そのものと合體して見らるべきものでなく、又土地の所有權は斯かる投資の存する与否とを問はず、人類の契約又は法律を以て發生

1904. p. 130.

4) Schelle, Turgot. 1909. p. 114.

5) Rambaud, Histoire des doctrines économiques. 1909. p. 231.

6) Turgot. Réflexions. § 17. Oeuvres. par Schelle. t. II. p. 542.

するものであるからである。チュルゴアはデュボンへの抗議の終結に於て『斯くの如き附加は予をして、予が欲せざる重農學派の一人たらしむるものである』と極言してゐる。⁷⁾

デュボンの訂正は猶此點に止まらない、第二十一節、奴隷の勞働を論ずる處ではチュルゴアの原文を大部分削除し、之に代ゆるに三節から成る遙かに原文より長きものを挿入してゐる。⁸⁾

(註) チュルゴアはデュボンの訂正に憤慨して、彼自身の原文を別刷にしたが、それは百部乃至百五十部に止まつたから、後に残らず、更に一七八八年に再度印刷したが、それも今日では稀れなものとなつてゐる。(Ashley's Preface to his english translation) デュボンとチュルゴアは此點に於て衝突したけれども、二人の間は二十年來の友人であり、チュルゴアの臺閣を去つて隠退後も交際し、デュボンの *Memoires sur la vie et les ouvrages de M. Turgot*. 1781-1782 は最も正確なるチュルゴア傳と云はれてゐる。フランスには由來チュルゴア著作集なるものは三種ある、一はデュボンの編纂せる九卷より成るもので、一八〇七年より一八一一年にかけて出版され第一卷には上記のチュルゴア傳が載せられたものであり、二はデール、及びデュサールの編纂せるもので二卷より成り *Collection des grands économes* の一として出たものである。之は大體デュボンのものと同じく、それに新らしく發見せられた手簡を加えたものである。三はシェールの編纂せるもので、チュルゴアのランツイユの家に残れる多くの原稿類を加へたものである。(Schelle, Turgot, p. 1-10.) 然るにデュボンの編纂せるもの及び其次のデールのものには『富の形成と分配』はデュボンの訂正し *Ephemerides* に出したものを其儘に收めてあつて、チュルゴアの原文は辛うじて一八八九年 Robineau によつて發見せられ *Petite Bibliothèque Economique* 中の一卷 Turgot の中に入れられた。シェール編纂のものは此原文により、又、アツシュレーの英譯は此ロビノーのものにより、更にアメリカのセリグマンより *Ephemerides* を借入れて比較對照したものである。

斯様にしてチュルゴア自身は重農學派なる一セクトに屬することを欲せざる旨を宣言したのであるが、彼の『富の形成と分配』は猶、大體に於て此派の面影を有するものであり、經濟學史家を

7) Hector Denis. Ibid. p. 131.

8) Turgot, *Réflexions. Oeuvres*. p. 544-546.

して『半ばの重農學者』と呼ばしめてゐるものである。⁹⁾ 以下彼の所説を追ひつゝ、之等の點を吟味しようと思ふ。

二 土地所有權及農業に就て重農學派との 背反及一致

今若し土地が一國の住民に、漸く自給自足するだけの程度に分配されてゐたと假定すると、彼等は消費に適應するだけの農業生産を行ふに過ぎないから、何等の餘剰を有せず、従て他人を雇傭して勞働せしむるが如きことは想像されない。乍然斯様な假定は實際許されない、何となれば土地が彼等の自給自足の點に分配される前に、土地は既に耕されてゐるものであり、此耕作の勞働こそ、土地分配の標準を定めるものであり、且つ土地所有權を認める法律を創造するものであるからである。最初の耕作者は彼の力の及ぶ限り耕作の範圍を擴張し、自己の消費以上の生産物を得るであらう。¹⁰⁾ 先に述べた假定に於ける自給自足と云ふことも、一定の土地を耕やして得る農産物の種類には限りがあるから、之を以ては種々なる生活上の欲望を充足し得ないことは自明の理であり、従て斯くの如き假定は一時存するとしても、直ちに事實上破られるものであらう。其處で土地の分配、従て土地所有權は土地耕作の勞働と云ふ人類の行爲によつて定まるものであり、此事實に基いて所有權を是認する法律が出来る。『耕作が進むと最良の土地は遂に全部占有せられ、後から來る者には、前者によつて顧みられなかつた不毛の土地のみが残される。乍然遂

9) Gide et Rist, Histoire des doctrines économiques. 5. ed. 1926. p. 53.

10) Turgot, Réflexions. Oeuvres. éd Schelle. t. II. p. 534-535.

には總ての土地は其所有者を發見するに至り、土地を所有せざるものは彼等の腕の勞働を交換するより以外に何等の財源を有せざるに至る。¹¹⁾耕作が最良の土地より順次、然らざる土地に及ぶと云つたのはリカアドウの地代論の前提と同じきものであるが、チュルゴーの土地所有權の基礎が斯くの如きものであるならば、それは當然に重農學派の所説と甚だしく異なるものである。重農學派は地主の存在と其不勞所得を辯護せんとするために出來たものさへ云はれてゐるのであるが、彼等は地主の土地所有を以て自然の秩序の指示する處であり、神の與ふる處なりとする。即ち土地所有權は人類の行爲によつて發生するのではなく、偶然に選ばれたる人々に神によつての贈物として有するもので、唯彼等には此贈物に對する反對給付として、人々にパンを與ふべき義務が課せられてゐると爲すものである。¹²⁾序説に述べたる如く、デュボンが人類の契約と、人々の法律と云へる句の中、人類のと人々の字句を省いたのは、彼等にとりては重視すべきは自然の秩序、自然の法であつて人爲のそれ等ではなかつたからであり、チュルゴーが人爲の秩序、法律のみを念頭に置き、勞働と云ふ行爲の結果に重きを置いたのと將に正反對にある。天恵と人爲、此の對照の中にチュルゴーが重農學派と離るべき一契機が存在する。

乍然チュルゴーは又、次の論述に於て重農學派の足跡を、いとも嚴格に追つてゐるかに見ゆる。チュルゴーによれば農夫は彼等の生産物、即ち食料と原料品とによつて、他の階級に何等依據することなくして生活し得る、然るに他の階級にあつては、先づ食料と原料品とを農夫に仰ぐにあらざれば生活を、職業をも營むことが出來ない。農夫の獨立性と優越性とは此點に存在す

11) Turgot. p. 539.

12) Gide et Rist. Histoire. p. 29. note.

13) Gide et Rist. p. 24.

る。『乍然此優越は名譽とか尊嚴とかの意味ではなくそは物理的必然である。』¹⁴⁾農夫は他人の労働を要せないが、他の人々は農夫の協力が無ければ生存し得ない、それで農夫の労働は、あらゆる財の循環の第一の動機 *le premier mobile* なのである。農夫が耕作の労働によつて、自己の消費以上に餘剰を生産するが、此餘剰が賃銀となつて他人を労働せしむるものである。農夫以外の労働なり職業に従事する人々は彼等の労働の提供に對し此賃銀を受け、之を生活費として更に農夫より食料なり、原料品なりを購入する、即ち受取りたる賃銀は再び農夫の手に戻るであつて、彼等は農夫によつて日々の生活を送るに過ぎない。換言すれば彼等は何等の餘剰を生産せざるものである。

以上の論述によつて我々はケネーによつて創始せられた重農學派が農夫を以て唯一の生産者となし純收入 *produit net* を發生するに反し、商工業者は單に財を加工し、移轉するに過ぎないで、所謂不生産者階級を形成すると云ふ所謂重農學派の階級觀が其儘に取容れられてゐるのを見る。

此論述に續く一節『労働者の賃銀は労働者間の競争によつて、生活維持の點に限られる、労働者は唯彼の生活費を受くるに止まる。¹⁵⁾』に於てはチュルゴーは後にラッサールによつて賃銀鐵則と名けられたるものを早く洞破してゐる。¹⁶⁾即ち彼によれば、腕と勤勉の他、何物をも有せざる労働者は他人に彼の苦痛 *peine* を賣るより他に生存の方法がない。彼は成るべく高く賣らうと欲するが、労働の價格は彼のみにて決せられるのではなく、其労働の買手との契約によらねばならぬ。

14) Turgot, Oeuvres. p. 537.

15) Turgot, Oeuvres. p. 537.

16) Rambaud, Histoire des doctrines économiques. p. 230.

然るに買手は、より少く拂はんと欲し、若し多くの労働者の中から撰擇することが許されるならば一番廉價なのを撰ぶ。『其結果労働者は相互の競争のため、價格を引下げることが餘儀なくされる。あらゆる労働に於て労働者の賃銀は生活維持に必要な點に制限されると云ふ事情は茲に當然に發生する』¹⁷⁾。

農夫の耕作労働が彼等の消費以上に餘剰を生ずるのは全く土地の肥沃と、此肥沃を更に大ならしめんとする彼等の智慮の結果であつて、此餘剰を以て他人の労働、或は其製作品を購入し、財の循環を促す。それ故に農夫は、あらゆる富の唯一の源泉 l'unique source de toutes les richesses であり、彼の労働は其報酬に當るもの以上を生産し、其餘剰を以て、社會のあらゆる労働を生かし *animent tous les travaux de la société*、むるものである。其處で社會は二つの勤勉なる階級に分たれる。一つは農夫であり、他は農夫より原料を購入し之を人類の欲望を充すに適する形式に變化し其生活費を得る階級である。此階級は結局農夫によつて維持せられ、農夫の餘剰によつて其生活費を得るので之を被傭者階級 *Stipendiée* と呼び、農夫を生産者階級と呼ぶ。被傭者階級とは即ち商工業者に當る。彼等は結局農夫から賃銀を受けて生存することゝ同じであるからである。茲に於て我々はケネーが商工業者を不生産階級 *classe stérile* と呼んだことを思ひ出す。彼は此名稱のため、特に商工業者を輕蔑するものと看做され、彼自身かゝる輕蔑の意なしと云へるにかゝわらず、攻撃を受けた點であつて、這般の事情を知れるチュルゴアは之を改めて被傭者階級と呼んだのであるが、其實質に於てはケネーの云ふ處と些の相異もないのである。此チュルゴア

17) Turgot. Oeuvres. p. 537.

18) Turgot. p. 538.

の名稱の變更に就ては、デュボンも之を是認したのか、何等訂正を施すことなく、チュルゴの原文の儘に發表してゐる。¹⁹⁾

人口稀薄で土地豊富な時代では耕作の勞働が土地所有權の基礎となつてゐたから耕作者は即ち地主であつた。然るに土地の所有權が大體定まつて、耕作によつて所有權を獲得することが出来ない時代となると、耕作勞働を營むものと、單に土地を所有する地主とは分離することゝなる。土地の耕作は勞働者の生活を維持して猶それ以上に純收入を發生すべきものであるから、此純收入即ち所得 *revenue* を收めて、自らは毫も勞働せざる階級を生ずることゝなる。²⁰⁾ 地主は此所得を以て個人の用に宛て、或は國家其他の公共の用に宛て得るので、之が處分は他の階級の人々が生活維持のみに宛てるに止まると異り、任意である、之を以てチュルゴはケネーの所謂地主階級を隨意處分の階級 *classe disponible* と呼ぶ。²¹⁾ 斯くて社會階級は生産者階級、被傭者階級、隨意處分階級との三つとなる。然るに此第三の所謂地主階級なるものは自壞作用を營むもので、此階級の所有權に大なる不平等を生じ、或者は前二者の何れかに陷沒するに至る。所有權の不平等を生ずる原因としてチュルゴの擧ぐる處は次の四種である。(一)最初は耕作者即地主であつたから勤勉にして體力强健なものは多くの土地を耕作するから此處に所有權の不平等を生ずる。(二)土地は肥沃の度を異にするから、同一程度の勞働でも其結果を異にする。(三)相續の際、子供の數に應じ土地を細分することによつて所有權に不平等を生ずる。(四)最後に最も重要な不平等の原因は個人の性質に基く、怠惰浪費である。²²⁾ 之等の原因からして地主の階級の中から所謂勞働者階級に

19) Schelle. Turgot. 1909. p. 116.

20) Turgot. p. 541.

21) Turgot. p. 542.

22) Turgot. p. 540.

落伍する者も亦少からず存する。

所謂地主階級を除いた他の二階級は、彼等の生活を維持する點だけ、賃銀として受領する事に於て相似たるものである。彼等二階級は労働の報酬以上に何物をも得ないのである。²³⁾乍然其相違する點から見ると生産者階級即ち耕作者は自分達の労働の報酬より以上に、地主の所得となる部分を生産するが、被傭者階級は之に反し唯彼等の生活維持に應ずる部分だけを發生するに止まる。即ち此二者は等しく労働に従事し其報酬を受けるに止まるが、其労働の異なる性質によつて一方は地主に所得を齎し、他方は之を齎さる者である。²⁴⁾以上彼の論述を追ひ來ると、彼の所説は、彼自身重農學派にあらずと主張し乍ら、ケネーの經濟表に於ける此派の階級觀、從ては又此派の根本觀念を構成せる部分を單に名稱を異にせるだけで其實質を其儘に繼承せるを見るのである。²⁵⁾

チュルゴアは次に地主階級が他人を労働せしめて收益を擧ぐる五つの方法を考察する。(一)賃銀労働者を使用する場合。地主は絶えず自ら監督せねばならぬ、然らずば彼等は收穫を隱匿するか、怠惰となるからである、そして此方法は労働者の存在が多く、賃銀が低廉な時でなければ、賃銀の支出が非常に大となる惧がある。(二)奴隸使用の場合。此場合を叙述する一節は、エフエメリード誌掲載に當つて、デュボンが著しく訂正した處であるが、此訂正文と原文とを比較するに、デュボンは奴隸制度が道德上、經濟上より不可なる所以をチュルゴアの所説以上に力説せるに止まつて、科學的考察としては原文より優れたりとは思はれない。例へば奴隸制度の存する結

23) Turgot. p. 542.

24) Turgot. p. 543.

25) Quesnay, Analyse du tableau économique. Oeuvres par Oncken. 1888. p. 305ff.

果、強國は弱國に宣戰して、被征服者を奴隸たらしめんとし、斯くて戦争は絶ゆることなしと云ひ、又チュルゴーが他の處で²⁶⁾ 動産の中に奴隸を數へてゐるのを全然削除したが如き、デュポンは常に理想的、道德的立場にあり、チュルゴーは現實に立脚してゐるので、科學的著述としてはチュルゴーの原文を以て寧ろ優れりと云はねばならぬ。チュルゴーは奴隸の耕作勞働に就ては彼等は過勞のため死亡すること多きを以て常に補充の方法を講せねばならず、其方法として掠奪、奴隸賣買等の相當面倒な事をせねばならぬから、漸次奴隸勞働は家内勞働となり、遂には根絶するに至ると云ふ²⁷⁾ (三)土地を讓渡し、年々一定額の支拂を受くる場合。地主は此場合 *Seigneurs* と呼ばれ、讓渡を受けた者は *tenanciers* 或は *vassaux* と云ふ。地主は此際は全く土地に對する執着から離れて一債權者となつて了まふのである。(四)折半小作制度。地主と耕作者とは收穫に就き折半するもので、大抵は土地に對する投資は地主の負擔である。此小作人は *Métayer* と呼ぶ、南部フランスでは此方法が多く行はれる。(五)小作制度。地主は小作人 *Fermiers* との契約によつて毎年一定額を收得し、地主は投資其他の危險に無關係なものである。北部フランスの富める地方は此方法を探る。而してチュルゴーは此第五の方法を以て農業耕作の最良法とする²⁸⁾。彼が支那の二留學生に『支那に關する諸問題』の注意書を與へた中にも、支那に斯かる小作制度が存在せるやを質問してゐる處から²⁹⁾ 見ても、若し支那に此制度が無ければ、國富増進の方法として此方法を採用すべきことを、此論文の執筆の原因から見て、彼等に教へたものと思はれる。以上を以てエフ・エメリード誌一七六九年十一月掲載の分は終る。チュルゴーの筆は以下、全く異なる方面に向

26) Turgot. p. 565.

27) Turgot. p. 544-548.

28) Turgot. p. 550-551.

29) Turgot, Questions sur la Chine adressées à deux Chinois. Oeuvres, p. 525.

ふ。

三 資本の意義と用法

重農學派の人々は、重商主義者が貨幣を以て富なりとする觀方を斥け、貨幣を以て單に名目的なものど考へ、彼等の根本的思想たる自然觀に基いて財そのものを重要視したことから、貨幣は單に副次的な、交換の手段たるに過ぎないのみでなく、貨幣を以て表象せらるゝ資本の重要性をも無視したものである。³⁰⁾尤も農業耕作に當つて農具、肥料、勞働者の賃銀等に對する前拂 *avances* としての投資を要することを認め、且つ之が投資の方法の巧拙によつて農業の興廢が分たれることを主張するけれども、其重要視する點は貨幣資本ではなく、具體化して投資される資本財である。而して此資本の發生する根源は年々の剩餘たる純收入 *produit net* であり、それは自然が、人類の協力に對して與へたる惠であり賜物 *don* である。

然るにチュルゴーにあつては重農學派所説の之等の重要點に關して全く異りたる態度を採る。先づ第一に、『富は土地の所有及び耕作以外の方法によつても構成される。……此方法は貨幣の所得と呼ばれるもの、或は貸金の利子より成る』³¹⁾と云ひ、富の形成が必ずしも農業耕作のみより成立するものでないことを示し、貨幣そのものが富を生むことを認めたのであり、第二に資本の形成は貯蓄より成り、自然の賜として土地そのものより發生するのではないことを認む。『土地の所得として、或は勞働、或は工業の報酬として毎年、自己が消費する必要あるより以上に受取

30) Petzet, Der Physiokratismus und die Entdeckung des wirtschaftlichen Kreislaufes. 1929, S. 144, 145.

31) Quesnay, Analyse du tableau économique. Oeuvres. p. 312-314.

32) Turgot, Réflexions. Oeuvres. p. 554.

る人々は、此餘分のものを蓄積する、之等の蓄積した價值は所謂資本である』³³⁾即ち後の學者が資本の成因を貯蓄にあるとする説に當る。

チュルゴーが重農學派の人々の自然觀に基く財そのもの、重視から、一轉して貨幣の不思議な作用に着眼し、經濟社會に於ける貨幣の職分の重要さに驚き、先づ之が發生の原因を探求し次で之が機能を拾數節に亘つて詳論する點は、七年遅れて公表されたアダム・スミスの『國富論』第四章『貨幣の起源及び用法に就て』³⁴⁾と殆んど規を一にせるものであり、後の貨幣學者の多く踏襲する處であるから茲に贅する迄もない。唯チュルゴーの貨幣論に於て、我々は從來重農學派の人々によつて看過せられた貨幣の偉大なる職能に就て新しく開拓された途を發見し、チュルゴーが此派と分袂する事の所以を知ることが出来るのである。

前に述べたる如く、チュルゴーにあつては富は土地と其耕作、並びに貨幣を以て形成される。

即ち重農學派の富の觀念は、更に擴張せられて、此派が重商主義に反對する旗幟たる貨幣即富の觀念が取容れられたものである。換言すればチュルゴーによつては重商、重農兩主義の根本思想が綜合され、更に一段の高所に齎されたものである。一段の高所に云ふは兩者が各々其地位を占めて對峙してゐると云ふのではなく、全く融合されて新しき立場にあるからである。今此事を證明するために彼が資本の機能、從ては亦、其用法に就き述べる處を吟味するであらう。

富が富そのものとして消費の對象である場合以外には、常に何等かの收益を發生する狀態に置かれてあるのを普通とする。而して此狀態は富を資本に化したものである。然るに此資本なるも

33) Turgot. p. 567.

34) Adam Smith, Wealth of Nations. Cannan's ed. vol. I. p. 24-31.

のは貨幣を以て表象されるを常とする。資本の特質が其収益性にありとするならば、農業に投資すると、商工業に投資するによつて、資本そのもの、性質に差を生ずるわけではない、重農學派の如く、農業にのみ収益性があり、従て資本は農業の投資にのみ制限せらるゝものではない。尤く此議論の成立するためには重農學派の所謂不生産的階級たる商工業にも収益性の存することを立證せねばならぬが、此事はチュルゴが特に節を設けて説く處ではなく、彼の所論全體を通じて觀るの他はないが、以下の叙述の間に自然に此事は明瞭となるであらう。さて農業と商工業とを問はず、資本が等しき性質を有するためには、それは先づ一定した形態を探ることが必要である。即ち資本が貨幣の形態を探ることによつて、あらゆる産業を通じて、資本たる性質を有することになる。若し重農學派の如く土地及び其耕作状態を以て資本とする時、或は重商主義者の如く、貨幣即資本と觀て、土地及び其耕作状態を除外する時、共に總ての産業を通じて資本の存在する所以を了解することが不可能である。總ての産業が収益を舉げ、其根底に資本が存在する理を明瞭にするためには資本が同一形態を、従ては又同一性質を有たねばならぬ。³⁵⁾此統一態は重商主義の云ふ處の貨幣ではない、彼等の云ふ貨幣は、貨幣即富の意味に於て、それ自身に効用を有する處の財に當る、斯様な意味の貨幣ではなくて、所謂價值の表象としての貨幣である。それ自身の具體的な効用の故に價值をもつものでなく、價值の表象としてのみ價值をもつ處の貨幣である。従て、それは土地その他、種々の具體的な財の價值を表象するものである。資本は此價值の表象たる貨幣の形態を探ることによつて初めて、農業にも商工業にも、共に等しく資本として

作用し得るのである。

此同一形態たる資本が、農業に、或は商工業に使用されるに従て種々の異りたる形式を採る。資本の用法は大別すれば五種となる。一は土地そのもの、購買に使用せられる場合である。³⁶⁾ 此投資せられたる状態に於ては土地、即ち資本である。第二は耕作に對する投資である。家畜、農具、肥料、農業労働者の賃銀等に當る、而して投資者が他人より土地を借入れる場合は之に對する地代をも含む、此地代なるものは地主の所得であり、土地の耕作より生ずる純收入 *Produit net* に相當する。³⁷⁾ 以上の二つの資本の用途は農業である。然るに資本は更に第三に工業上の企業に使用せられ、第四に商業者に使用される。³⁸⁾ 更に第五には拉典語に所謂 *usura pecuniae* たる利子を發生する貸金として使用される。³⁹⁾

斯くの如くチュルゴアの資本の觀念は農商工業及び單なる貸金として總ての人々に具體的に投資せらるゝと共に、斯くあらゆる社會階級に使用せられることは、即ち其根底に資本が資本として抽象的統一的形態を有することであつて、重農學派の如く、土地及び其耕作状態のみ、或は重商主義の如く、具體的な貨幣のみ、を以て資本と考ふると全く其考方の系列を異にする。チュルゴアは謂はゞ高次の立場にあるのである。

ケネーが『經濟表』に於て商工業者を不生産的階級 *classe stérile* と呼び、工業者は生産階級たる農民から原料を購ひ、之を加工して再び生産階級及び地主階級に其製品を販賣し、其賃銀を以て自己の生活を維持する以上、此の世に何物をも齎さない階級であると云ひ、商人も亦、此財の流

36) Turgot. p. 567.

37) Turgot. p. 570.

38) Turgot. p. 568, 572.

39) Turgot. p. 576, 577.

通の間に處して生活を維持するに過ぎないとなされたものである。⁴⁰⁾然も之等の不生産階級も現實に於ては彼等の生存に要する費用以上に彼等の所得を獲得する。ケネーは當時の商人の暴富を獲得せるを見て、商業とは取引 *traffic* に過ぎないで、謂はゞ富の横領 *dilapidation des richesses* であると云ひ、或は彼等は儲ける *gagne* のであつて生産するのではないと稱し、ル、メルシェー、ド、ラ、リビエールの如きは商業を譬へて、互に反映するように置かれた多くの鏡の如きもので、其間に置かれた物體は此多くの鏡に映されて、段々大きくなつて見えるが、實物は依然として同じである、商業の利益は畢竟斯様なものであると云ふ。⁴¹⁾乍然、事業の収益なるものは農業が農産物を、工業が工業品を、商人が之等の運搬によつて欲望の調達を、提供するによつて得られ、等しく貨幣を以て評價され、其結果貨幣を以て支拂はるゝことは、重農學派の時代に於ても既に然りである。而して貨幣の獲得或は事業の収益性は彼等も亦認めて居る處であるから商工業が彼等の云ふ如く、假令不生産的であつても、其収益の存することは拒み得る處ではない。此現實を彼等が理論を以て歪曲しようとしても爲し了はせるものではない。寧ろ率直に農業と共に商業に生産性を認め、投下せる資本に、等しき性質の収益性あるを是認すべきである。チュルゴーは此點に着眼し、農業も商工業も同じく利潤 *profit* を發生し、『農業上の企業家も必然的に工業上の企業家と同じである』⁴²⁾と明言する。茲に明かにチュルゴーが重農學派と別かれ、アダム、スミスの出現を俟つ消息を見ることが出来る。

資本があらゆる産業界に導入せられることゝなると、資本を有する人と有せざる人との對立が

40) Quesnay, *Analyse du tableau économique*. Oeuvres. p. 309ff.

41) Gide et Rist, *Histoire des doctrines économiques*. 1926, p. 32. 15.

42) Turgot. p. 570.

生ずる。此事は工業に於て殊に甚だしい。『一方には企業者、工業家、雇主、其他大資本の所有者は彼等の資本を使用して多くの人々を勞働せしめて利潤を作り、他方には彼等の腕より以外に何等の財産を有せず、日々の勞働に従事し、利潤とは無關係に賃銀のみを受ける人々が存在する』此文句によつて見るにチュルゴーは夙に工業上に於ける勞資の對立を認めて居り、且つ前にも述べたる如く、後者の賃銀は競争の結果低落し、漸く生活維持の點に支へられてゐると賃銀勞働者の悲慘なる状態を述べてゐるが、對立が進んで競争に入ることとは勿論考ふる處ではなかつた、且つは又、賃銀が競争によつて生活維持の點に止まることは彼によれば自然の道理であり、必然の經過であつた、從て賃銀政策に關する議論の如きは遂に見るを得ないのである。以上を以てエフエメリード誌一七六九年十二月掲載の分の考察を了はる。

四 利子の發生原因に就ての重農學派との分離

資本の用途は上に述べたる如く五種あるが、其中最後のもの、即ち其目的が消費にあると生産にあるかを問はず、唯、利子を獲得するがための貸金は其範圍の最も廣汎なものである。然るに此種の貸金に就ては昔からスコラ哲學者が『何物をも望まずして貸し與へよ』Mutuum date, nihil inde sperantes の標語を振翳し、或は『貨幣は貨幣を生ぜず』と云つて非難する。チュルゴーは自由放任の立場から此非難に答へ、貸手も借手も共に自由契約により、利益ありと思惟するから金の貸借を行ふのであるがため、唯第三者の利害に關せない限り、兩當事者が其契約で満足を得る

43) Turgot. p. 569, 570.

44) Turgot. p. 537.

ならば、之を禁じ、或は干涉するは不合理である、利子の高は資本の存在量及び危険性の多少によつて定まる、それ故に『此貸借は完全に兩當事者にとりて平等であり、従て公平である』⁴⁵⁾乍然利子の發生する原因は普通に解せらるゝ如く、貸手は其期間、當該資金を自ら利用して收益を擧ぐるを得ざるがため其對償として發生するものでもなく、又資本が危険に暴露されてゐるからでもなく、又借手が其資本によつて利益を得るがためでもなく、更には又資本自體が利益を發生する性質を有するためではない。利子の發生するは、資本が其所有者に屬すると云ふ簡單な事實に基く。⁴⁶⁾所有者は其資本の處分に就ては自由であり、他人に貸與するの義務を有せない。借手は之を請求する權利を有せないのであるから、結局利子を支拂ふことを約して貸借が成立するので、利子の發生は全く資本の所有と云ふ一つの事實に基く。廣く云へば所有權の結果である。⁴⁷⁾従て所有權を是認する者は當然に、合法的に利子の存在を是認せねばならぬと云ふ。此チュルゴーの利子の是認は又重農學派の利子論に對する反抗ともなる。⁴⁸⁾蓋し重農學派にあつては利子は唯純收入のみより支拂はるべく、純収入は農業生産によつて發生するものなるが故に、利子の存するは農業に放資されたる資本にのみ止まるのであつて、商工業の資本及び一般の貸金には利子の生ずる理由なく従て此種のものに利子の存することを否定するからである。然るにチュルゴーにとつては前述せる如く、利子は資本の所有と云ふ事實から合法的に發生し、資本は其用途は五つに分たれるが其資本たるに於ては何等の差違がないのであるから商工業にも亦、他の一般の貸金にも利子の發生するは不合理ではないと見る。重農學派の考ふる如く利子は農業に就てのみ合理的だと

45) Turgot. p. 578.

46) Turgot. p. 580.

47) Turgot. p. 580.

48) Petzet, Der Physiokratismus und die Entdeckung des wirtschaftlichen Kreislaufes. 1929, S. 146.

しても、事實上に於ては總ての貸金は何等かの報酬を伴はずしては行はれないのであるから、不合理なるものを禁ずるとせば、農業以外の投資には國家の權力を以て干渉せねばならぬ。此事は重農學派の根本信條の一たる『自由に行かしめよ、自由に爲さしめよ』の自由放任の原理と矛盾せざるを得ない。⁴⁹⁾

チュルゴの云ふ如く、利子の發生原因が資本の所有と云ふ一事にありとすれば、利子は單に農業上の投資にのみ生ずるものではなく、商工業上の投資其他一般の貸金にも發生せねばならぬ。此點に於ても亦チュルゴは重農學派より一步を分つのである。

五 資本の形成に關するデュボンの訂正の不合理

利子發生の原因が以上述べたる如く資本の所有にありとするならば、そして大體の基調として自由放任主義を採るならば、利子の率は從て商品の賣買に於けるが如く需要供給の關係によつて定まらねばならぬ。尤も借手の償還能力に疑懼の存する時には利率は高からざるを得ぬが此事を除けば利率は資本の需要多き時には高く供給多き時には低からざるを得ない。⁵⁰⁾而して資本の供給多きは國民に勤儉の風あるにより、之に反して供給少きは奢侈なるがためで、歐洲諸國に於て利率の漸次低下の傾向あるは勤儉による資本の蓄積漸次加はるがためである。⁵¹⁾從て一部の論者の如く利率を法律を以て定むべしと云ふは需要供給の關係を無視したものであり、實行不可能の議論であると云ふ。

49) Petzct. S. 146.

50) Turgot. p. 580, 581.

51) Turgot. p. 588, 589.

さて以上の如く資本が利子を發生するとすれば、茲に貨幣は二つの評價を受けることになる。資本は貨幣のみに限らないが、貨幣は之が表象であるから、今貨幣を以て姑らく資本を代表せしめると、貨幣は商品或は勞働と交換されると云ふ意味で評價せらるゝ場合と、利子を發生すると云ふ見地から、利子を利率を以て還元することによつて評價される⁵²⁾。此二つの評價方法は各々獨立して、異なる原理によつて支配される。一定の貨幣が商品の量を僅かしか支配せない社會に於ても、利子の高いことがある。今若し一國の通貨量が二倍し、貨幣の對商品價值が半減したとしても、此増加した通貨量が總て市場に出て商品の購買に當てらるゝ限り、貸金の利率の低下することはない。蓋し資本の利率の高低は蓄積さるゝ資本の量に關係し、市場に流通される分量と關係がないからである。つまり此二つの評價方法は全く異なる原理に基くのであるから一方の變化は同時に他方の變化を當然に齎すものではないのである⁵³⁾。此一節に於てエフ・メリード誌の編輯者デュポンは反對の聲を擧げてゐる、乍然前に述べたる如くチュルゴアはデュポンに本文を訂正する事を拒否したのであるから、デュポンは自己の意見を脚註として述べてゐる。それによるとデュポンはチュルゴアが資本の形成を以て所得の蓄積に基くと云ふのに反對であつて、蓄積は單なる消極的意味しか無いので、事實、資本は寧ろ所得の支出方法如何に關する、即ち所得を有効に生産的に支出するによつて資本は構成されるのであると云ふ。『資本の形成の要素の中から蓄積と云ふ簡單な考は除外せねばならぬ』⁵⁴⁾人類の原始狀態に於て人々が自然の生産物に依據してゐた時、之等の生産物を蓄積することは毫も彼等の生活を改良することでもなければ又資本を形成す

52) Turgot. p. 581.

53) Turgot. p. 581-586.

54) Note par Dupont. p. 583.

ることでもなかつた。彼等は食事を欲する時に随時に自然物によつて食欲を満足せしめてゐたので蓄積の如きは考へなかつた、人智稍々進んで勞働をすることゝなり、又器具を使用することゝなり、之等に要するものは總て支出の形式により、之を巧妙に支出するものは有効な結果を擧げるのであつて、其間に蓄積なるものは作用せない。社會が充分進歩すると蓄積は却て危険を齎す惧がある。地主は勞働者から取立てた穀物を蓄積すると、穀物の價格は低下し、多くの生産階級は困難に陥る。資本の形成は決して消極的な蓄積によるのではなく、寧ろ積極的な支出、即ち生産的支出によるのであり之を巧妙に使用することによる。デュボン⁵⁵⁾は斯様に考へ、チュルゴ⁵⁶⁾の蓄積の觀念を以下此意味に解釋すべしと注意してゐる。尤もチュルゴも有効な積極的支出、生産的支出の必要は認めてゐるのではあるが、彼の蓄積の觀念はデュボンの如く解釋することは不可であつて、矢張普通の意味の蓄積、所得の餘剰の貯蓄 *épargne* とすべきである。例へばチュルゴの此論文の結論とも見るべき部分、即ち最後の一つ手前の節は彼が重農學派と分袂し乍ら、再び最後に逆轉して重農學派の根本主張を取容れた處であるが、其節の標題は『土地は動産或は資本の總額を供給するものであり、之等のものは年々に蓄積される土地生産物の一部のみより形成さる』⁵⁷⁾とあつて、蓄積が資本構成の不可缺の要素であり、彼の資本學說に於ける重要な役目を有するものである。之をデュボンが以下に於てはチュルゴの蓄積を、生産的支出の義に解すべしと云ふのはチュルゴの學說の體系を破壊するものと云はねばならぬ。生産的支出は既に存在せる資本を使用し之を増殖することにはなるが、資本そのものゝ成立を解くものではない

55) Turgot. p. 600.

い。未だ資本にらざる處の年々の所得の餘剰の蓄積が資本そのものを形成すと云ふチュルゴアの説は假令、發生的解釋 *genetische Erklärung* であると立場の異なる人々から非難されるにしても、又資本の意義に關する舊説であること云はるゝにしても、チュルゴアの全體系にとつては重要な要點である以上、デュポンの如く解釋することはチュルゴアを全く骨抜きにすることである。私はデュポンの訂正を全く無意味なりと見る。

六 結論に於ける重農學派への復歸

さてチュルゴアは前に資本の用途として、一、土地の購入、二、農業投資、三、工業投資、四、商業投資、五、一般の貸金の五つを挙げたのであるが、今此五つを比較し且つ其相互關係を考へる。チュルゴアは第一の土地の購入は、最安全に且つ自ら勞することなくして所得を挙げ得るのであるから、所得の資本に對する率は他の投資に比して低からざるを得ない。處が第五の一般の貸金なるものは之も自ら勞せざる點に於て第一のものと所得の性質を等しくするけれども、借手の如何によつて資本そのものを失ふの惧があるから所得の率、即ち貸金の利率は前者より高からざるを得ない。第二、三、四の農工商業への投資は、投資者の注意と勞力、才能、危險、猶其上に之等の投資物件の磨損破壊に對する修繕、補充等の多くの支出を要するが故に所得の率は第一、第五のものよりは遙かに上に廻はらなければならぬ。斯様に資本の用途によつて、所得の率を異にするものであるが、又一方から見ると之等の異なる所得相互の間には互の影響が存し、資

本の一用途に所得の率が非常に高ければ資本はその用途に集中することとなり、所得の率低き處を立去ることとなる。斯くて集中する處には資本の供給多きため利率低下し、他方資本の立去りたる處には供給少きため利率上昇し結局水平面を保つこととなる。⁵⁶⁾資本が利率の高きを追ひて流動し、需要供給の均衡から平均率に歸着するの理由は後に英國古典學派の根本主潮の一となつたものであるが、チュルゴーが此思想を表現したのは、重農學派が農業生産のみ純收入を生むがための資本の投下は農業に對してのみ行はるべしと説いたのに就て、商工業及び一般の貸金の如きも亦、所得即ち重農學派の所謂純收入に相當するものを發生することを主張し以て此派の根底を覆さんとしたものである。若し農業にのみ資本が集中する時は、農業に於ける純收入の資本に對する歩合低下せざるを得ないのであつて、決して重農學派の稱ふる如く、農業に資本が集中する程、純收入の割合が増加するものでなく、反對に低下するものである。此派の人々は商工業に就ては漸く生産費を償ふに止まり何等の餘剰を生むものではなく、假令存在しても、それは儲けるのであつて生産するのではないと云つたが、儲ける *gagner* 事が生産すること、全く別種の事に屬すとしても、其處に貨幣所得の存する以上、商工業にも亦 資本は投下さるべき理であつて、資本は農業上の純收入のみを唯一の目的として投資されるときは云ひ得ないものである。

さてチュルゴーは此『富の形成と分配』の最後の十節に於て以上述べ來つた處を總括し、再び之を吟味することによつて誠に不思議にも、今迄多くの點に於て反抗し來つた處の、そして彼自らも此派に屬すと見らるゝ事を嫌つた處の、重農學派の所説に歸りつゝあるのを觀る。例へば第九

十節は國民の富の總和は(一)土地の純收入を其當時の利率を以て還元した土地財産の總額、(二)國民の有する動産の總和、から成ると云ひ、動産と貨幣とを混同すべからざるを説いて、貨幣は其素質としての金銀として *l'argent en nature* 動産の極く僅少な一部分を構成するものに過ぎないと云ふ。⁵⁷⁾そして資本なるものを國富の中に加へることは之を二重に計算したことになる、既に投下された資本は動産不動産の何等かの形態を採るが故に、資本額を國富の中に加へれば二重となる。⁵⁸⁾此結論によつて示されたる處は、重農學派が、かつて重商主義の貨幣を以て富なりとする觀念を排した主旨に相當するものである。チュルゴアは土地及び其他の具體的な財産の總和を以て國富と考へ、貨幣は動産の僅少なる一部としてのみ考慮の中に加へらるゝ、貨幣量を以て國富を代表せしめなかつた。此點に於て彼は重農學派へ再び復歸したものと云ひ得られる。

チュルゴアによれば資本主なるものは其實質に於て、重農學派の地主階級に相當するものであつて、それ以外の獨立した特殊の地位を有するものではない。何となれば資本主の所得は、地主階級の所得と同じく自由に處分—消費し得るものであつて、資本主は地主と同じく *classe dispo-*
nable に當る。⁵⁹⁾尤も地主は土地を所有する意味で總て資本主であると云へるが、總ての資本主は必ずしも地主であるわけではない。或は自ら農工商の企業に従事することがある、此場合に於ては其所得に關しては、勞働者階級と等しく、自由處分の状態に置かれぬ。此企業者となつた時に自由處分階級から脱すると云ふ點に於てチュルゴアの考は全く重農學派のそれに屬する。蓋し『經濟表』に於ける三階級中、自由處分階級は地主階級のみであつて他の二階級は其所得に就て何

57) Turgot. p. 593, 594.

58) Turgot. p. 594-596.

59) Turgot. p. 596, 597.

等の處分權をも有せざるものであるからである。而して資本主は自ら地主となるか、企業家となるかの以外に猶、チュルゴーによれば一般に貸金をなし利子を獲得するのであるが、此際は又資本主は自由處分階級であつて地主に於けると等しい。斯様にして資本主は自ら企業家たる以外、即ち土地を有するか、他人に貨幣を貸附ける場合、而してそれはチュルゴーにとつては資本主の資本主たる本質であるが、此際は自由處分階級として地主階級に屬する。茲に於てかチュルゴーが資本の農業以外に於ける偉大なる活動を認め之が収益性を是認した點から重農學派と全く袂を分ちて經濟學史上に於て、新しき分野の開拓者たる地位を與へらるべく考へられたものが、又もや逆轉して重農學派の陣營に歸つたのである。

チュルゴーにとつては資本主階級は地主階級と等しく自由處分階級であるが、唯其所得に於て租税に相當する部分に就ては自由處分權がない⁶⁰⁾。之は丁度、重農學派に於て租税の支拂者は純收入を獲得する地主階級であり、租税は唯純收入にのみ課せられることによつて、國富増加を害せないと云つた點に當るのであつて、チュルゴーに於ては租税負擔者は稍其範圍を擴めて地主のみならず資本主に及んだのであるが、此兩者の所得は自由處分の點に於て性質を等しくし、經濟社會に於ける地位を等しくせるものである。

チュルゴーの重農學派への復歸は『富の形成と分配』の最後に近づくに従つて其色彩を濃くする。例へば『土地が動産或は資本の總額を供給する。』と云ひ、『土地の純收入のみが所得となるは動かざる眞理なり』⁶¹⁾と云ひ、或は『資本が一部分は勞働者階級の所得からの貯蓄によつて形成

60) Turgot. p. 597. 598.

61) Turgot. p. 600.

せられる、然し此所得は土地から常に發生するものである⁶²⁾と云ひ、或は『國內に於て眞に自由に處分し得るは土地の純收入だけである』『貸金の利子は土地の所得か、商工農の企業の所得から得られるけれども、之等の所得は土地生産物の一部分に他ならぬものである』『地主以外の社會階級の受取る所得、利潤は或は賃銀となり、企業利潤となり或は利子となるが、それは地主の所得から支拂はれるものであり、此意味に於て彼等の性質は異らざるものである』⁶³⁾と云ふ。重農學派主の張は之等の個所に於て隨所に發見し得るものである。

七 結 言

以上の考察によつて知らるゝ如く、チュルゴアの『富の形成と分配』は其最初の部分と最後の結論とに於て重農學派の跡を襲ふと共に其中央部分に於て此派と全く異なる立場にあつて相容れざる主張を示せるものである。而して農業以外に於ける資本の一般的収益性を認め利子の發生原因を究め、諸企業の特種性と其自由競争を認める邊りに於て、チュルゴアは將に出現せんとするアダム、スミスと一脈の連關を有する⁶⁴⁾。チュルゴアは重農學派の學說を實際政治に應用した人と普通に云はれる處である⁶⁵⁾が、彼が學說の最も纏まれるものと云はるゝ『富の形成と分配』に於ては、以上の叙述によつて知らるゝ如く、將にそれは重農學派の最後を齎せるものであり、次の時代への歩を既に準備せるを見る。

62) Turgot. p. 601.

63) Turgot. p. 599, 600.

64) Blanqui, Histoire de l'Economie politique. 5 ed. 1882, p. 338, 339.

65) Salin, Geschichte der Volkswirtschaftslehre. 1929, S. 42.

Mombert, Geschichte der Nationalökonomie. 1927, S. 232, 233.

(一) チュルゴーにあつては財産は歴史上の事實として存在し、人類の創造せる處であるが、重農學派にあつては、それは自然の秩序 *Ordre naturel* によつて指示された神の啓示であり、人類社會に天より與へられた當然の制度である。チュルゴーにあつては人の勞働、人爲の秩序に重きを置き、自然の秩序、自然の權利は側に棄てられたものである。⁶⁶⁾

(二) チュルゴーは商工業に於ても農業と等しく収益性を認め、重農學派に於ける如く、一方は儲けるので、他方は生産するのであるとの區別を撤廢し、等しく収益を生ずる生産業たることを認める。

(三) 從て資本は重農學派に於ける如く、農業にのみ使用せられ、収益を生ずるのみではない、それは商工業及び一般の貸金に於て等しく利子を生む。

(四) 資本の用途及び利子の發生に就て、チュルゴーは重農學派よりも遙かに自由なる立場にある。此派が農業のみ純收入を生むが故に資本は農業にのみ用ふべしと制限し、利子は農業資本のみに與へらるゝとなす點を越えて、あらゆる點に資本及び利子の存在を認める。

(五) 重農學派は大體に於て自由放任主義の立場にあつて自由貿易主義を採るも、猶其當時存在した封建制度の影響によつて制限せられ、ケネーの自由貿易政策の如きは輸出の自由を偏重し、殊にそれは穀物の輸出自由を主張することであつて、一般に輸入の自由は其蔭に隠れて居たのである。⁶⁷⁾ チュルゴーに於ては自由放任主義は更に其度を濃くして、⁶⁸⁾ アダム、スミスに接近せるを見る。此

66) Gonnard, Histoire des doctrines économiques. Tome II. 1922, p. 111.

67) 拙稿「ケネーの自由貿易論」商業及經濟研究第五十五冊所掲

68) Gonnard, Ibid. p. 111.

點は彼がケネーと並んで自分の師と仰ぐグールネーの影響と思はれる。⁶⁹⁾ 一七五九年六月二十七日グールネー死するや、チェルゴーはメルキユール、ド、フランス誌上に弔辭を掲げたが、⁷⁰⁾ 其中に於てグールネーの自由貿易論を讃仰し、商業の自由は賣手をして、生産を奨励せしむるに足る代價を得せしめ、買手には最良の商品を最廉の代價にて獲得せしむることゝなるを以て、自由貿易こそは國家の採用すべき最良の政策であると考へた。⁷¹⁾ 此グールネーの商業重視の思想と、ケネーの重農思想とが、相混じてチェルゴーの頭腦を支配し、彼の『富の形成と分配』にも此二思想の交流が表現されたものと考へられる。兎まれ重農學派よりアダム、スミスへの過渡期の最大著作たるチェルゴーの『富の形成と分配』は經濟學史上の注目すべき著述として看過するを許されざるものである。

69) Schelle, Turgot. 1909, p. 91.

70) Turgot, Eloge de Vincent de Gournay, Oeuvres. Tome I. p. 595ff.

71) 拙著「重農派經濟學の人々」昭和四年、一九六頁